

## 2. 食道癌の放射線治療

越谷病院 放射線科

小林俊策, 西林文字, 片田芳明, 川島実穂,

古田雅也, 野崎美和子

越谷病院 消化器内科

玉野正也

### 【目的】

従来食道癌の治療は手術主体であったが, 近年積極的に放射線療法, 特に化学療法を同時併用した化学放射線療法がおこなわれ, 手術療法と遜色のない治療効果が報告されている。

今回, 越谷病院における食道癌の放射線治療患者を対象に, 過去 10 年の治療成績を解析し今後の課題を考察する。

### 【対象】

- ◆症例数: 261 例 (1997 年 1 月~2007 年 12 月)
- ◆年齢: 46~94 歳 (平均年齢 67 歳, 中央値 66 歳)
- ◆性別: 男性 223 例, 女性 38 例
- ◆初回治療目的: 新鮮例; 237 例, 再発例; 24 例
- ◆組織型:
  - ▷扁平上皮癌; 251 例 (96%)
  - ▷腺癌; 4 例
  - ▷未分化癌; 3 例, 粘表皮癌; 2 例, 小細胞癌; 1 例

### 【結果】

- ① 病期別生存率では早期 (0~I 期) 食道癌の 5 年生存率は良好であった。
- ② 進行 (II 期以降) 食道癌の 5 年生存率は低かった。
- ③ 治療開始時の全身状態 (PS) は治療結果と明らかな相関関係があり, PS3 以上では 3 年生存も得られなかった。
- ④ 照射単独群の生存率が他よりも低かった。

### 【考察】

- ① 早期の段階で食道癌を発見することが重要であると考えられた。
- ② 治療開始時の全身状態 (PS) が悪い患者や高齢者照射単独という治療法を選択されることが多く, このことが放射線治療単独群の生存率に関係していると考えられた。
- ③ 越谷病院における食道癌の治療成績は他の施設とほぼ同等と考えられた。

### 【結論】

さらなる治療成績の向上のためには

- ① 院内統一レジメンでの化学放射線療法
- ② 院内統一スケジュールでの経過観察
- ③ 適切なタイミングでの救済治療 (手術)
- ④ 各科の連携と共通の治療方針が重要な課題であると考えられる。

## 3. 当院における非小細胞肺癌の放射線治療成績

放射線医学

河辺哲也, 玉置幸久, 江島泰生, 橋本禎介,

楫 靖

【目的】非小細胞肺癌の治療方針と, その成績を検証する。

【方法】2006 年より 2010 年に当院にて根治的放射線治療が完遂された非小細胞肺癌症例で, 手術併用例を除く 37 例を対象とした。年齢の中央値は 72 歳 (42-90), 男:女比=36:1, 組織型は扁平上皮癌:腺癌:大細胞癌:腺扁平上皮癌=24:11:1:1, T1:T2:T3:T4=2:16:9:10, N0:N1:N2:N3=9:3:18:7, 病期 I:II:III=3:6:28, 放射線単独:同時化学放射線療法=9:28, 放射線治療は 1 回 2Gy の対向二門照射で, 総線量は 50.4~72Gy (中央値 60Gy) であった。同時併用された化学療法は CDDP+VNR:13 例, CBDCA+VNR:14 例, CBDCA+PTX:1 例, である。各生存率の解析には Kaplan-Meire 法と logrank 検定を用いた。

【結果】経過観察期間の中央値は 10.4 ヶ月である。初期治療効果は CR2 例, PR31 例, SD3 例, PD1 例で奏功率は 89%。再増悪を 26 例に認め, うち局所再増悪 17 例, 遠隔再発 9 例であった。全体の MST は 14.7 ヶ月。担癌生存 23 例で, 原病死 13 例であった。放射線単独, 同時化学放射線療法の 1 年粗生存率はそれぞれ 80%, 64%, 1 年無増悪生存率はそれぞれ 40%, 33% である。重篤な有害事象は認められなかった。

【結語】当院の非小細胞肺癌に対する放射線治療について検討した。